

緒方洪庵先生生誕200年記念講座 第四弾

緒方八重の故郷・名塩に教行寺・生家跡を訪

ねる名塩紙漉き体験お花見バスツアー

講師：人間国宝（名塩雁皮紙制作技術保持者）

谷野武信氏

日時：2010年4月3日(土)

行程：大阪駅 教行寺 金仙寺湖畔の堤桜見物
西洋料理「船坂」お花見ランチコース

学通り・緒方八重実家跡 谷野製紙所
にて名塩和紙の紙漉き体験 夙川沿いの桜見物
大阪駅 難波駅 天正 駅



緒方庵生誕 200 年・第四段は、妻緒方八重の故郷・名塩を訪ねた。

緒方八重は、29 歳の洪庵に 17 歳で嫁ぎ 13 名の子供を産み、千人以上と言われる塾生たちもわが子のように世話をした。

江戸で幕府奥医師兼西洋学問所頭取となった洪庵が 54 歳で急死した後に、ロシア・オランダ・フランスへと三人の息子達を幕府留学生として海外へ送り出し、福澤諭吉ら塾生に「おっかさんのような人」と慕われ老後は現在の中央区の緒方ビルの場所にあつ除痘館の物を隠居小屋として余生を過ごし 65 歳の生涯を閉じた。

八重を緒方洪庵に嫁がせたのは、父の億川百記だった。百記は紙すきを業としていたが、医師を志し大阪にでて蘭学塾「思々斎塾」で学び、名塩を戻り医師として開業するかたわら、輸入洋薬サフランを主薬とした製薬販売業を手広く営んでいた。師の中天遊から自分の息子の教育も任せたいほどの秀才で勉強熱心、性格も温厚な緒方洪庵を紹介されその人柄と才能にほれ込み、娘・八重を嫁がせる。長崎留学等の資金援助はもとより孫たちの養



育を引き受け、大いに娘と共に洪庵を助け支える。



大阪駅からバスを走らせ約 1 時間。名塩和紙の人間国宝・谷野氏と合流し、先ずは蘭学通りにある八重夫人の生家跡に建つ胸像を見学。道路をわたり、坂道を昇って 1475 年、蓮如の第 19 子の蓮芸が赴任し開いた名塩御坊と称

される教行寺を訪ねた。この寺では歴代蓮芸の子孫が嗣ぎ、京都の公家や名家との婚姻関係も深く毛利元就の曾孫藤も連芸の孫准超に嫁ぎ、紙漉きについても紙漉き業者や和紙扱い商人

のまとめ役もつとめた等と本堂で説明を受けた。確かに谷間の小さな集落にあたる寺院にしては大きな本堂がかつての賑わいを物語っていた。



教行寺を参拝した後に、バスを走らせて金仙寺湖畔の堤桜を楽しんだ後に、西洋料理「船坂」へ。広がる田園風景の中に宮沢憲治の「銀河鉄道の夜」の世界を彷彿とさせる開業 17 年のアンモナイトをイメージしたコンクリート吹き抜け三階建のレストランの建物が忽然と建っていた。扉を開けると、



都ホテルなどのレストランで 20 年修業したシェフと、画家だったお父様の優しいタッチの絵画がお出迎え。切り抜いた窓から眺める穏やかな風景にも似た優しい味わいの、お花見



をテーマに地元の野菜と共に味わう魚と肉のフルコースをゆっくりと味わった。

西洋料理「船坂」 078-903-1158

緒方八重は名塩和紙のような人だった。名塩の擬灰石を砕いて漉くので色焼けしにくく、弾力があり、虫食いせず、薄いがしなやかで強い。江戸時代には藩札として重宝され紙「名塩千軒」と称され紙漉きの里として多くの職人がいて



栄えた。今唯一名塩紙を漉く術を保持している人間国宝の谷野武信氏の工房を訪ね、名塩紙の特徴をお聞きすると共に実際に紙漉きを体験。

谷徳製紙所 079-7610-02224



帰りには、バスを夙川沿いに進め、満開の桜並木の風景も車窓から楽しんだ。

参加者：

塾生：池崎宗男・井上章・大森史子・北原祥三・木村正治・小寺千世・佐伯和美・下野謙・田中俊三・中島一・中村孝夫・浜田真弓・原田彰子・森川千世子・丸山公子

一般：枝松緑・大原豊・田浦ちずこ・徳岡葵・徳岡豊裕・中島哲・森吉裕三 (アウイ順・敬称略)